

北京日本学研究中心

通

讯

《第二十一号》

责任编辑：山下纪久枝 谯燕 邮政编码：100081 Tel:8422277--584 1992.6.15

第4届日本学中日学术研讨会简报

第4届日本学中日学术研讨会已于5月23日结束。此次研讨会举行了纪念讲演、特别讲演、以“近二十年中国的日本学研究”为题的研讨会和语言、文学、社会、文化四个分科的专题报告会。5月20日上午的开幕式，出席的中方贵宾有中日友好21世纪委员会中方首席委员张香山，中日友协会长孙平化、副会长王效贤，国家教委国际合作司司长于富增，北外院长王福祥等；日方贵宾有前日本驻华大使、日本国际交流基金顾问鹿取泰卫，日本驻华大使馆参赞荒木喜代志、秘书高桥力丸，日本著名学者中根千枝、鹤见和子、大冈信等。《光明日报》、中国新闻社等十多家首都及日本的新闻单位的记者到会采访。开幕式后，孙平化、鹿取泰卫和王福祥三位先生分别作了纪念讲演。

两次特别讲演分别于5月20日下午和22日下午举行。中根千枝先生《亚洲诸社会的比较》的报告把南亚、东南亚作为参照背景，从社会人类学的角度对中日两国社会的差异进行了比较研究。王家骅先生《关于“诚”中心的儒学—中日儒学的比较》则从儒学史的角度考察了以“诚”为中心的中日儒学的异同。大冈信先生的《日本诗歌的特质》抓住日本诗歌短小、含蓄的特质，多角度地分析了短歌、俳句在现代日本社会中复兴与繁荣的深刻动因。鹿野先生的《文化意识的现在》则从考察战后日本文化意识的心路历程入手，分析了日本所面临的在新的世界环境和社会基础上怎样实现文化之未来的课题。周一良先生的《新井白石论》把新井白石置于江户时代矛盾重重的社会背景之下加以考察，刻画了新井白石“五尺小身浑是胆”的人格。鹤见先生的《从内发现代化论角度看到的现代中国及其与日本的比较》则提出了“互相交换样板”理论，强调后发现代化国家只能走自己的路。并对中国建设小城镇的工业化道路给予了高度评价。

5月23日的研讨会，下崇道副教授、刘耀武教授、李芒教授、万峰教授，分别就最近20年来中国的日本哲学、语言、文学及历史研究做了基调报告，并在听取了王守华、修刚、揭侠和孙承四位先生的评议之后，回答了听众提出的问题。

5月21日和22日上午举行的12场分科报告会，共有48位代表宣读论文，其中语言16人，文学12人，文化12人，社会8人。总的来说，关于日本语言的研究，面广而且细致，水平较高，并有向探讨语言与文化之关系发展的趋势。在关于

日本文学的论文中,研究日本文学大家的论文与中日文学比较的论文各占一半,研究阵容整齐。日本文化研究则呈现出多姿多彩的局面,研究内容涉及到了典籍整理、中日儒学比较、文化与现代化等许多重大课题。研究日本社会的论文,相对来说内容较为分散,其中中日家族制度、教育制度等的比较研究,代表了我国目前研究日本社会所取得的阶段性成果。

通过此次研讨会,可以从中发现几个可喜的势头。首先是老专家雄风犹存,中青年学者的成长更是喜人;其次是研究范围迅速扩大;第三点是取得了一批阶段性的成果。尽管从论文的内容看,有许多重要的研究领域如经济、法律还少有人涉及,许多研究还停留在孤立进行的阶段,但是,各学科彼此交叉,研究呈多方位的趋势已经十分明显,许多论文已很难断定属于哪一个分科,这表明了我国的“日本学”正在迅速形成之中。研讨会筹委会中方委员长陈海良先生总结说,此次研讨会规模较大,代表层次较高,论文质量高、范围广。纪念讲演、特别讲演、基调报告很受欢迎,听众达300人左右。总之,通过中日双方的共同努力,本届研讨会圆满结束。(袁方)

◇ 助教进修班访日研修 ◇

第7期助教进修班学员将于6月17日到7月16日赴日研修访问。前两周在东京附近活动,学习茶道、插花,观看歌舞伎表演,进行民俗活动等,还将聆听日本语国际中心京极所长及其他学者的有关日本教育、民俗、日中的文化比较等方面的讲座。后两周主要是研修旅行,除到京都、奈良、广岛、岐阜等风景名胜地旅游外,还预定访问京都的同志社大学和一些教育机关、工厂等。(宋金文)

☆ 公开讲座 ☆

- ◎第9次 5月23日(星期四) 日本国宪法的和平主义的意义 浦部法穗先生
- ◎第10次 6月4日(星期四) 日本中世的家族关系 今井雅晴先生
- ◎第11次 6月11日(星期四) 中国的博戏 大谷通顺先生
- ◎第12次 6月25日(星期四) 关于格助词 铃木英夫先生

○ 春 游 ○

5月30日,“中心”组织日本专家游览了长城、定陵地宫、航空博物馆和小汤山乡等处。小汤山乡现在仍坚持集体经营,是近郊较富庶的农村。新型农家和乡镇企业引起了专家们极大的兴趣。航空博物馆陈列着毛主席的专机和人民空军的大批退役战机,令人大开眼界。一天的参观,仿佛徜徉于历史和现实的时空交错之间,虽说行色匆匆,但专家们兴趣盎然,毫无倦意。(徐向东)

※本“通讯”7月、8月停刊,望谅。

※本“通讯”责编之一山下纪久枝先生将期满回国,在此,对山下先生表示衷心的感谢。

第 4 回 日 本 学 中 日 シ ン ポ ジ ウ ム

第4回日本学中日シンポジウムは5月23日に閉幕された。今回のシンポジウムでは、記念講演、特別講演、「最近20年の中国における日本学研究」というテーマによるシンポジウム基調報告、及び語学、文学、社会、文化の4つの分科会の発表がなされた。5月20日の開幕式には、中国側来賓として中日友好21世紀委員会中国側首席張香山氏、中日友好協会会長孫平化氏、同副会長王効賢氏、中国国家教育委員会国際合作司司長于富増氏、北京外国語学院王福祥院長、日本側来賓として元中国大使・国際交流基金顧問鹿取泰衛氏、日本大使館荒木喜代志参事官、同高橋力丸書記官、及び著名な学者である鶴見和子先生、中根千枝先生、大岡信先生などが参加した。また、「光明日報」社、中国新聞社等10数社の中国・日本の新聞社が取材に来た。開幕式の後、孫平化氏、鹿取泰衛氏、王福祥院長がそれぞれ記念講演を行った。

特別講演は、5月20日午後及び22日午後に分けて行われた。中根千枝先生は、「アジア諸社会の比較」というテーマで、中国と日本の差異を理解するための背景として、南アジア、東南アジアを視野に入れて、社会人類学的な角度から比較研究を行った。王家驊先生は、「“誠”中心の儒学について——中日儒学の比較」というテーマで、儒学史の角度から“誠”を中心とする中日儒学の異同について考察した。大岡信先生は、「日本詩歌の特質」は、短くて含蓄に富むことであるとし、現代の日本において短歌・俳句が復興期・繁栄期を迎えている理由を、様々な角度から分析した。鹿野政直先生は、「文化意識の現在」というテーマで、戦後の日本の文化意識の移り変わりの考察を手始めとして、現在日本が直面している新しい国際環境及び社会の基礎の上に、どのように文化の未来をめざしていくかという課題について分析した。周一良先生の「新井白石論」では、新井白石を江戸時代の矛盾に満ちた社会背景の中に置いて考察を加え、“五尺小身渾是胆”という白石の人柄を浮き彫りにした。鶴見和子先生の「内発的発展の視点から見た現代中国と日本の比較」では、相互交換モデルについて説き、近代化の後発国も独自の道を歩むしかないことを強調している。また、中国の小城鎮工業化路線に対して、高く評価した。

5月23日のシンポジウムでは、最近20年の中国における日本学研究について、卞崇道先生（哲学）、劉耀武先生（語学）、李芒先生（文学）、万峰先生（歴史）がそれぞれ基調報告を行い、コメンテーターの王守華先生、修剛先生、掲俠先生、孫承先生のコメントの後、聴衆の質問を受けた。

5月21日午前・午後及び22日午後には、12の分科会において、日本語学16名、日本文学12名、日本社会8名、日本文化12名の計48名が研究発表を行った。語学は広範かつ緻密で

水準が比較的高く、また、言語と文化の関係に関する研究も増えてきている。文学では、日本の大作家及び中日比較文学に関する論文が半数を占めており、研究者の顔ぶれがそろっていた。文化の研究は多彩で、典籍整理、中日儒学の比較、文化、現代化等の様々な課題に及んでいる。社会の発表は、内容が比較的分散しており、中日家族制度、教育制度等の比較研究は、中国の日本社会研究の現段階における成果と言えよう。

今回のシンポジウムを通じて、いくつかの喜ばしい趨勢が見られた。まず、ベテラン研究者の健在及び中堅・若手研究者の成長があげられる。次いで、研究の範囲が急速に広められてきていること、第3に、現段階における一定の成果をあげていることである。今回の研究発表では、経済・法律等、いくつかの重要な領域に及ぶものが少なく、まだ多くの研究が孤立的な研究段階に留まってはいるが、各研究分野は互いにクロスしており、研究が多方面にわたる趨勢はすでに明らかである。どの分科会に属するか決めがたい論文もかなり見られた。これは、中国における「日本学」研究が現在急速に形作られつつあることを示すものと言えよう。中国側シンポジウム委員長・陳海良先生は、「今回のシンポジウムは比較的規模が大きく、代表者の層が厚い。発表の質も高く、範囲も広い。記念講演、特別講演、基調報告は非常に好評であり、300人近くの聴衆が集まった。中日双方の協力と努力によって、今回のシンポジウムは成功裏に終わった」と総括している。（袁方）

研修コースの訪日研修

第7期研修コースの研修生は、6月17日から7月16日まで、訪日研修を行う。前半2週間は東京近辺で、茶道、生け花、歌舞伎見学、ホームステイ等の活動、及び日本語国際センター京極純一所長をはじめとする先生方による講座を受講する。後半は研修旅行で、京都・奈良・広島・岐阜等の名所見学、同志社大学等の教育機関、工場等を参観する。

公開講座

- | | | | |
|-------|----------|--------------------|--------|
| ♡第9回 | 5月28日（木） | 「日本国憲法における平和主義の意義」 | 浦部法穂先生 |
| ♡第10回 | 6月4日（木） | 「日本中世の家族関係」 | 今井雅晴先生 |
| ♡第11回 | 6月11日（木） | 「中国のギャンブルゲーム」 | 大谷通順先生 |
| ♡第12回 | 6月25日（木） | 「格助詞について」 | 鈴木英夫先生 |

専Ⓜ家活動・春遊

5月30日、センター日本側専Ⓜ家が長城・定陵・航空博物館・小湯山等を参観した。小湯山は集団経営を続ける比較的豊かな農村で、郷鎮企業に対する先生方の関心が高かった。

☆7月、8月は「通訊」の発行をお休みさせていただきます。